
ミッションは ” 龍の命名 ”

koru.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッションは”龍の命名”

【Nコード】

N6645R

【作者名】

koru.

【あらすじ】

龍を捕らえる手段として召還された女性の勇気と愛の物語 第二弾（あらすじ内に一部誇大表現があることをお詫びします）

『愛いの』

「うん、可愛いね！ 天使のようだね！ このほっぺとか食べちゃいたい！ ああっ！ 大好きっ！！」

出産後、火龍が覗きやすいようにとベランダの窓際に置かれたベツドで、真紅と漆黒の混じった髪を持つ、ふくふくほっぺの我が子に頬擦りしつつ体を休める。

『……妬ける程”メロメロ”だの』

火龍の呆れるような声に微笑みを向ける。

「メロメロだもん！ そうだ！ 名前決まった？」

以前から火龍にお願いしていた名前だが、名前をつけるという行為が龍には無いため、イマイチ要領を得ず未だに名前が決まっていない。

『うむ……。やはりイサミが名づけぬか？』

「付けて良いなら付けるけど？」

『いや、やはりワシが考える』

もう何度も繰り返したやりとりの末、火龍が思案するように目を閉じ唸る。

「インスピレーションでいいよー？ きつとそれが、この子に与えられた名前なんだから」

『インスピレーションなあ』

火龍が目を開き大きな顔をこちらへ向け、その長い舌を伸ばしてくすぐるように赤ちゃんの頬を舐める。

『……いや、やはりもう少し時間をくれ。少し、外に行って考えてくる』

「へ？」

意を決したように火龍は立ち上がり、神殿ニルに来てからほとんど使うことの無かった背中の翼を広げ、大きく羽ばたき飛び立った。

「ぶわっ!!」

少しは周囲のことを考えてほしい!

風圧に髪の毛がぐしゃぐしゃ! 赤ちゃんは咄嗟にガウンの中に庇ったので無事。

「……そんなに思いつめなくてもいいのにねえ? 困ったお父さんですねー」

くすくす笑いながら赤ちゃんに話かけると、あの風圧の中悠々と寝ていた寝顔の口元が、同意するようにもぞもぞと動いた。

火龍の動きにいち早く反応したのは、マイルガイル国より密偵として入っていた隠密達だった。

手元の伝送石に火龍が神殿を離れたことを伝え、ものの数分もしないうちにマイルガイルの王宮から転送魔法を使って王宮付きの高位魔道士達がやってきた。

「やっと火龍が離れたか!!」

「これで御子を捕か: 保護できる!」

「速やかに御子を連れ帰るぞ、アレは我が国のものだ」

冷静な声が他の者を制し、その声を合図に魔道士達は神殿の境界が最も薄くなっているところに特殊な相殺魔法陣を描き、神殿の者に気づかれること無くその内部へと侵入を果たした。

「ふえ……っ」

「あら? お腹空きましたか?」

不意に目を覚まし、ふえええ、というまだ弱弱しい泣き声を上げた我が子に、満面の笑みで近づくと。

生まれたてで肺活量がまだ無いから泣き声も小さくて可愛いっ!

これが甥っ子(9ヶ月)くらいになると、肺活量もついてかなり大きな声が出せるようになる。

それもまた楽しみ！。

取り急ぎおっぱいですね！

たっぷり出て駄々漏れなので、濡れタオルで胸を拭いてからマイ天使ちゃんの口に乳を含ませる。

この子は生後5日なのに本当に飲みっぷりがいい！

甥っ子などはおっぱいの飲みが悪くて退院までに体重が減って、義姉は軽くノイローゼになっていたっけ。

そんな苦労を知っているだけに1日1リットルくらい飲んでるのではなかるつかというこの子の健啖ぶりはありがたい。

……多少飲みすぎなのではないかと思うけど…まあ飲まないよりいいか。

両乳飲ませてお腹一杯になったマイ天使を縦に抱き、肩甲骨の間をさすってゲップをさせていると、部屋のドアが乱暴に開け放たれた。

「イサミ様！ お逃げください！！」

「へ？」

入ってきたのは僧兵の人。

その慌てたようすにきよとんとするあたしに、続いて入ってきた神殿長が急ぎつつも丁寧な動作であたしをベッドから下ろし、脱いでいたガウンを羽織らせる。

「曲者が御子を狙っております。どうぞこちらへ」

そう言っただけで赤ちゃんを抱くあたしを本棚の前へ案内し、その一角を操作するとそこに秘密の通路がぼかりと口を開けた。

「すご…っ！」

「この先に部屋がありますので、少しの間そこでお待ちください。

危険を排除しましたらお迎えにあがります」

強引にあたし達を通路へと押しやった神殿長を振り向くと、外見はまだ20代後半の彼はあたしを安心させるように微笑みを浮かべ、

腕の中にはあらず不思議！！ 3歳ほどの愛らしい男の子がっ！
燃えるような赤い髪に混じる漆黒の髪、真紅の瞳。

これはあれね、間違いないわ我が子だわね。

「大きくなつたわねえ、母さん吃驚だわー」

最も可愛いとされる1〜2歳の間をすっ飛ばされたのは結構シヨツクです。

龍族の成長つてこういうものなのかしら。

「かあしゃま！ とおちゃんが、なまえくれた！ だからおれ、かあしゃま、まもれる！」

ん？

火龍が赤ちゃんの名前決定したから、赤ちゃんがあたしを守る？
いや、もう赤ちゃんじゃないけど。

というか、一人称が”俺”なんだ？

美形で、似合うつちゃ似合うんだけど、ボクとかワタシとかの方が似合いそう。

「かあしゃま、まもつてあげるからね！」

つて、つい5日前に生まれた我が子に守られるってどうさ？

でもまあ子供の意欲を折るのも可哀想だし。

「ありがとう、頼りにしてるわ」

そう言つてハグすれば、嬉しそうに抱きついてくる柔らかい子供の体。

あああ！！ 可愛いっ！！

でも裸のまんまつて可哀想よね、あたしのガウンじゃ大きいし…。
つて思つてたら、ベッドに掛かつたシーツを裂いて勝手に体に
巻きつけてるし、力とかも半端無いのねえ龍族の子つて。

そしてトコトコとドアまで行くと、背伸びして鍵を外した。

「ちよ、ちよつと待ちなさいっ！ どこ行くの！？」

慌てるあたしに、こつちを振り返ると、ニッコリ笑つて爆弾発言。
「かあしゃまは、あぶないからまってて。 おれ、ちよつといつて

くる」

そう言つと、追いかけてよつとしたあたしの目の前でドアを閉めて足音も軽く走っていく。

あたしはと言えば、閉められたドアに顔をぶつけ……。

「……やってくれるじゃないの……っ！　って、あれ！？　なんで開かないのよっ！？」

鍵も掛かっているドアは、あたしが渾身の力であけようとしても、うんともすんとも言わない。

「ちよつとーっ！！　何よこのドア！？　立て付け悪いにも程があるでしょー！！」

押したり引いたり体当たりを繰り返したり、かなり、かなり頑張ったけどドアは開かず。

あたしは、途方に暮れて、ドアの前に座り込んでいた。

竜の子とはいえまだ生後5日の我が子が、あたしを守るとか言つて危険に飛び込んでいったのに、母親であるあたしは何もできずに座り込むしかない無力感。

心配のあまり、お腹まで痛くなってきたわよ……。

痛みの増す腹部を押さえて、埃っぽい床に倒れこみ、痛みと不甲斐なさに涙で水溜りを作ったところで意識が無くなった。

「かあしゃまあ、かあしゃまああ……！！」

すすり泣く愛らしい声に、意識が浮上する。

目を開け、ゆっくりと顔を横に向ければ、くりんとした赤い瞳と視線が合い。

ああ、あたしの赤ちゃんだ、と、手を伸ばして抱き寄せた。

「……こおの、馬鹿息子がっ。生まれて5日で母ちゃんの胃に穴開ける気かっ！」

「ご、ごめんなしゃいっ」

ビクリと怯えた腕の中の子をぎゅっつと抱きしめて、顔中にキスを降らせる。

「…痛いところは、無いの？ 怪我は？」

「な、いつ、おれ、げんきっ」

少し体を離して目視するが、確かに異常はないようだ……っていうか、着替えた？

動きやすそうな上下を着ている。

「イサミ様、ご気分は如何ですか？」

神殿長が近づいてきてグラスに入ったレモン水を渡してくれる。

「あたしは大丈夫だけど…。何がどうなったの？」

気づけばこの部屋も、あたしの部屋じゃないし。

「……ええと、一言で言いますなら、御子様がほぼ一人で賊を退治してくださいました」

生後5日の子が？

首を傾げるあたしに、神殿長は言い辛そうに言葉を補充する。

「マイルガイル国より来た高位魔道士数名が今回の賊だったので、御子様は1名を敢えて逃がした上で他の魔道士を肅清してくださいました。まだ幼くはありますが、流石火龍の御子様です」

んん？

神殿長のべた褒めに、腕の中のチビ助は得意げな顔をしてから、何か思い出したのかしょぼんとする。

「でも、かあしゃまのへやよごしちゃったの、ごめんなしゃい」
んんんん？

汚した、って…？

『イサミ！ 名を決めたぞ！』

ぬつと入ってきた大きな火龍の顔にどつかれ、危つくベッドから転がり落ちそうになる。

「危ないでしょっ！！」

べしべしと、火龍の硬い顔を叩く。

『すまんすまん。 そんなことより、名が決まったぞ！』

反省の色が無いわね、まあそんな事よりも。

「で、どんな名前にしたの？」

『ギルデイ・ロウ・ジッスティ・フェルタ・オルクス・モツテゲレ・ファンマミア・リフィタツダ・スクレイブ・ドーン』

……………。

『古代語で、火を統べその手に天と地の祝福を受け、精霊と始祖なる龍の慈愛の下に生まれし、最愛の子、という意味だ』

「ジユゲムかよっ！」

とりあえず突っ込んでおいた。

覚えきれるか、そんなもんっ！

「ギルね！ 了解したわ！」

『いや、ギルじゃなくギルデイ・ロウ・ジッス「ギルね！」………一生懸命考えたのだから』

「本名はそのギルデイ・ロウ・なんたらでいいじゃない。 呼ぶときは短いほうが楽だからギルにしましょうねっ。 よかったわね、ギル…って、あら、寝ちゃってる」

抱きしめていた腕の中ですよやすやと眠っているギルを抱きなおして、成長しても可愛いお顔を堪能する。

『うむ、少し能力ちからを使いすぎたようだな。 神殿長、ギルを連れて行って休ませろ』

「畏まりました、火龍様。 イサミ様、ギル様をお預かりいたしま

す

爆睡しているギルを神殿長が大事に抱きかかえて、部屋を下がる。なぜ？ 折角一緒に寝ようと思ってたのに！。

『さて、これで2人きりになれたなイサミ』

そう言つと、火龍はぴとつとその大きな顔をあたしにくつつけ…

…。

「……で、なんで又人間の姿になんの？ 発情期で処女に触られたときだけじゃなかったの!?」

以前と変わらず赤銅色の髪と美しい肉体に申し掛かられて顔が引きつる。

火龍は蕩けるような顔をして、腕の中に困つたあたしを見つめる。

「ワシ以外のオスの臭いが付いていなければ問題無い（直訳：他の固体にやられてなければ問題なし）。因みに今は発情期だ。イサミ、愛してる」

「ちょ！ ちよつと待って！ あたし、子供産んだばかり！ まだ無理！ 無理!!！」

そう言つて火龍の腕の中から逃げようとするれば、火龍はニヤリと笑み、右手をそつと下腹部の上に持つていった。

そして、ほわんと温かくなったかと思うと、産後じくじく残っていた痛みがすっかり消え失せている。

「ハンドパワーですかっ!」

「……治療術だ。この程度なら、ワシの治療でも問題なく癒せる」
聞けば、火龍は治療が苦手なんだそうな、得意なのは攻撃ですつてよ。

「さて、これで体の問題は無くなった。我慢していた分、じっくり味わわせてもらおうか」

輝いた火龍の真紅の瞳は攻撃的な光を孕んでいて、ゾクリと背筋が慄いたのは、その後降りかかるであろう目くるめく行為を期待したからではない！ 絶対！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645r/>

ミッションは”龍の命名”

2011年5月23日06時40分発行